

## B 指導内容・方法

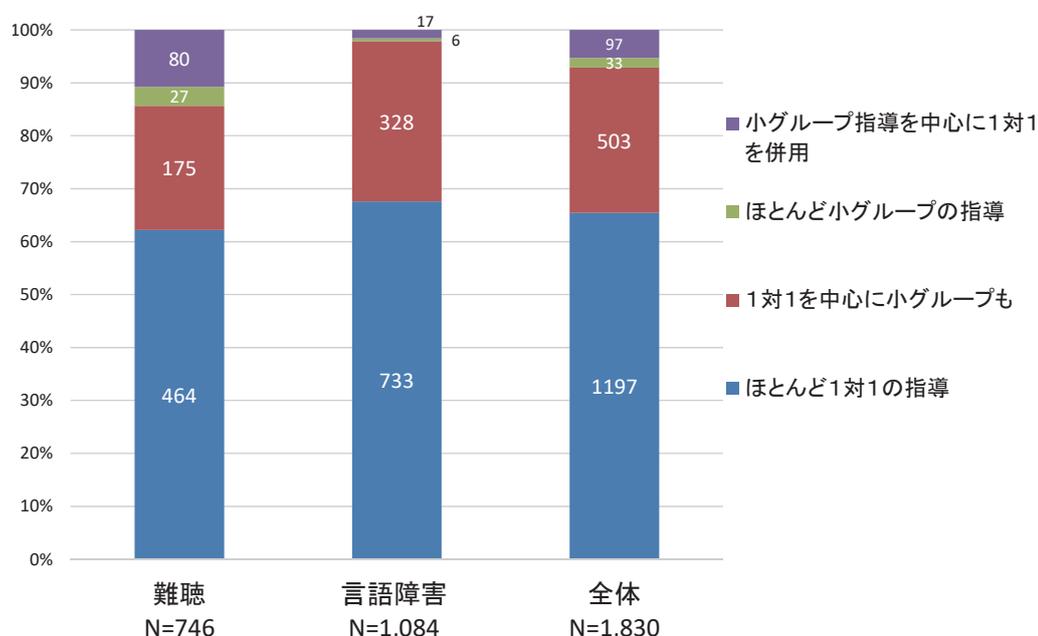
### 1. 指導形態など

#### (1) 指導形態

指導形態について、以下の4つの選択肢から各特別支援学級・通級指導教室の全体的な傾向として回答するよう求めた。

1. ほとんど1対1の指導である
2. 1対1の指導を中心とし、小グループによる指導を併用している
3. ほとんど小グループによる指導である
4. 小グループによる指導を中心とし、1対1の指導を併用している

今回の調査では、初めて、難聴のある子どもの指導についてと言語障害のある子どもについてとに分けて実施した。結果を図B-1に示した。



図B-1 指導形態

全体を見ると選択肢「1」と「2」の合計が9割を越えており、1対1の指導を中心としていることがわかった。言語障害では98%で1対1の指導が行われていた。一方、小グループによる指導を行っている選択肢「2」と「3」と「4」の回答を合わせると、全体では、4割弱であった。小グループを実施している割合は、難聴の方が言語障害より高かったが、難聴では、「小グループ指導を中心」とする回答の割合が高かった。

今回の調査では、小グループによる指導を行う理由について自由記述で回答を求めた。主な回答は以下の通り（回答をそのままの形で掲載）であった。

## ①難聴のある子どもの指導について

### <1対1の指導では得られない効果>

- ・集団生活（ダイナミックな活動）を体験する良い機会となるからです。
- ・コミュニケーションの取り方の練習
- ・子ども同士の会話で最後まで相手の話をきいて自分の考えを言う態度を育てる。
- ・互いに伝えあうことでよりはっきり話そうとする姿勢をもたせるため

### <子どもの実態等に応じて>

- ・普通高校進学のため、コミュニケーション能力を高める必要があるため
- ・障害理解が進む 自己肯定感の育成

### <経営上>

- ・経営上、1対1の指導はできないから。
- ・指導者が1人しかいないから
- ・国語の時間に来室するため、複数になってしまう。

## ②言語障害のある子どもの指導について

### <1対1の指導では得られない効果>

- ・吃音のある子に限りグループでの学習を併用。同じ吃音のある子がいることを知り、吃音についての理解を深めるために行っている。
- ・吃音児童同士が直接会う機会が少ないため。
- ・構音障害児は子どもどうしで伝え合う力をつけるため。
- ・コミュニケーションの向上は相手がいることによつてのびると思うため。
- ・個別指導での学びをいかす場と考えるため。
- ・子どもがグループと楽しみ、かかわりや会話が活性化する。
- ・クラスへの波及を期待できる。
- ・遊びの中でルールについての意識を深めたり、共感の気持ちを促す場合、小人数での活動から丁寧に学習を進めることで、目標とする力が獲得しやすい。
- ・SSTの学習で他の子の反応を見ることで気づきが生まれやすくなる。

### <経営上>

- ・人数が多く指導時間帯の中に入りきれないため
- ・クラスに複数対象者がいるため、クラスの教科学習時間の確保
- ・自校通級であり、授業時間の取り出しは学級ごとが最も指導体制として、組みやすいから。
- ・時間割の都合上やむをえなくグループ指導になっている。

### <その他>

- ・保護者の交流
- ・他の生徒との交流や集団での学習を保護者が希望しているため

## (2) 指導時間

指導している全ての子どもの指導時間について、以下の条件にあてはまる指導対象児の人数の記入を求めた。

1. 主に、通常の学級等の授業終了後である子ども
2. 主に、通常の学級等の授業時間中のいずれかである子ども
3. その他

この設問に記入された対象児は 30,639 人であった。結果は、図 B-2 に示すように、62.0%の子どもが授業時間中に指導を受けており、35.8%の子どもが授業終了後に指導を受けていた。前回調査の結果では、授業時間中が 59%、授業終了後が 39%であったので、授業終了後に指導する割合が減り、授業時間中の指導が増えている。

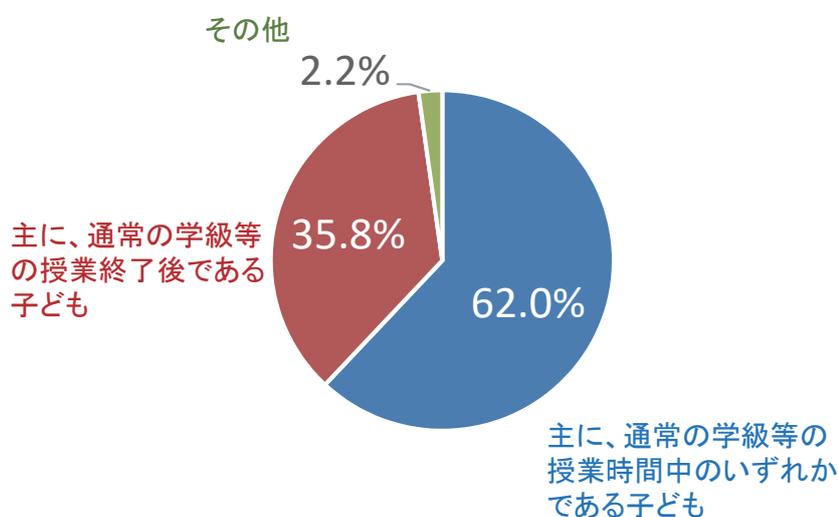


図 B-2 指導時間

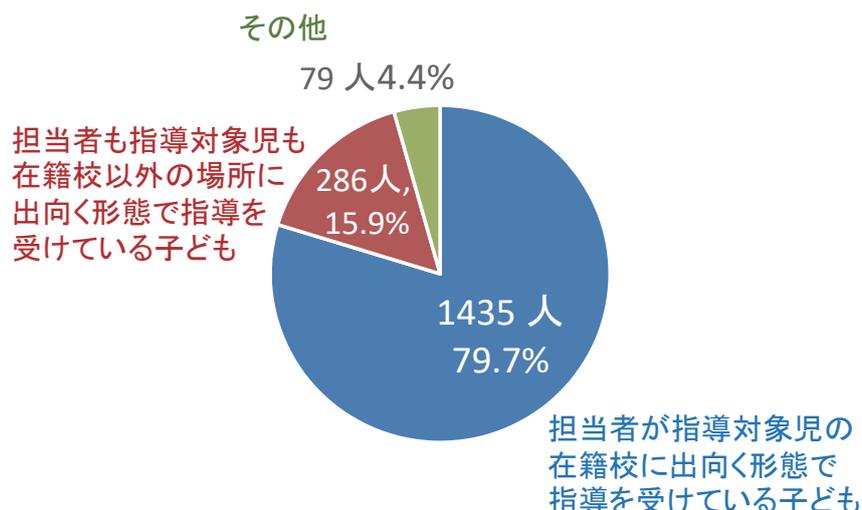
「3. その他」への自由記述として回答が多かったのは、「昼休み」、「始業前」、「長期休業中」であった。少数回答だが「毎月土曜にある学校公開日」、「清掃時間」、「給食準備中」があった。また「(子どもが) イライラした時」、「不登校の子ども」との回答もあった。

## (3) 巡回による指導について

巡回による指導について以下の3種に分類し、それぞれについて指導対象児の人数の記入を求めた。

1. 担当者が指導対象児の在籍校に出向く形態で指導をしている
2. 担当者も指導対象児も在籍校以外に出向く形態で指導をしている
3. 上記以外

結果を図 B-3 に示した。全体では 1,800 人が巡回による指導を受けていた。前回調査では 1,195 人であり、増加傾向が見られる。「担当者が指導対象児の在籍校に出向く形態で指導をしている」が 1,435 人(79.7%)、「担当者も指導対象児も在籍校以外に出向く形態で指導をしている」が 286 人(15.9%)、「上記以外」が 79 人(4.4%)であった。



図B-3 巡回による指導

「3. 上記以外」への自由記述としては、「教育委員会から指導員が対象児の在籍校に向向いている」、「主に対象児に難聴教室に来てもらうが学期に1回在籍校に出向き指導している」などの回答があった。

## 2. 指導について

指導において重視していることを、障害別に（難聴、構音障害、吃音、言語発達の遅れ、その他）、自由記述で回答を求めた。

### ①難聴のある子どもの指導について重視していること

この項目への回答は779件あった。回答の内容は、9つのまとまりに整理・分類できた。以下に内容のまとまりごとに列挙する。なお、記述は内容の重複を避けつつ、意味が損なわれない範囲で文言を整理してある（以下②から⑤まで同様）。

#### <言語・コミュニケーション面に関すること>

- ・友だちとのコミュニケーション
- ・語彙の拡充
- ・言語指導
- ・発音・イントネーション
- ・日本語力
- ・文法、構文力
- ・正しい日本語を使う姿勢
- ・手話を使ってのコミュニケーション力
- ・日記指導
- ・読話力の向上
- ・グループでの関わり方
- ・声の調整
- ・気持ちの表現
- ・話す自信

- ・話す楽しさ

＜聴覚に関すること＞

- ・指示が聞こえたかどうかの確認
- ・聞こえに関するスキルの向上（音の弁別、等）
- ・聞こえ方、聴力の状態への配慮
- ・集団の中での聴く力
- ・聴覚管理

＜情報の保障に関すること＞

- ・情報保障
- ・情報の不足を補うこと

＜連携に関すること＞

- ・在籍学級との連携、在籍学級での学習中の支援
- ・家族との連携
- ・医療との連携
- ・福祉との連携（福祉センター等）
- ・言語聴覚士との連携

＜環境に関すること＞

- ・静かな環境
- ・机や椅子にテニスボールをつける
- ・座席の配置
- ・教材の工夫、視覚的な教材の活用、タブレット等の活用
- ・何でも話せる雰囲気作り

＜教師の対応に関すること＞

- ・指示を短く、はっきり話す
- ・口元を見せる
- ・ゆっくり、はっきり話す
- ・聞こえがよい方の耳のそばで話す
- ・理解したか否かの確認、文字で確認すること
- ・子どもの気持ちにより添う

＜自立・生活面・心理面に関すること＞

- ・自立・生活力の向上に向けた支援
- ・自己肯定感
- ・情報を得る力を身につける
- ・自己理解
- ・自己決定
- ・進路
- ・情緒の安定
- ・心の成長
- ・障害の軽減
- ・障害の受容
- ・交渉力（書いてください、もう一回言ってください、等）
- ・日常で困ったときの解決策

＜態度・姿勢に関すること＞

- ・聴く姿勢、傾聴態度、話す人を見ること
- ・ソーシャルスキル
- ・わからないことは聞くという姿勢、自分から聞くこと
- ・相手の気持ちを考えて行動すること
- ・言葉づかい（敬語を正しく使う、等）
- ・支援・助けを求めること

＜教科等の学習に関すること＞

- ・学年相応の学力
- ・高校受験に向けた学力

②構音障害のある子どもの指導について重視していること

この項目への回答は1,017件あった。回答の内容は、5つのまとまりに整理・分類できた。

＜構音指導に関すること＞

- ・舌の位置や動き
- ・舌の安定、脱力、柔軟性
- ・機能訓練
- ・口腔機能、口腔器官の動き
- ・口の運動、口腔トレーニング
- ・口腔周辺の筋肉を付ける
- ・はっきりとした口形
- ・呼吸法
- ・体の動き、身体の運動機能の向上、体作り
- ・耳の訓練、聴覚的認知力の向上
- ・聴覚的弁別力、正しい音を聞き分けること
- ・構音の誤りの傾向の把握、実態把握
- ・耳作り、口作り、音作り、
- ・構音可能な音から誘導すること
- ・繰り返し練習すること
- ・構音指導の時期
- ・自己修正力をつけること
- ・般化、日常生活での定着
- ・自己の発音の認識、自覚
- ・正しい音の定着
- ・苦手な発音の指導
- ・系統的指導、段階的指導、スモールステップでの指導
- ・擬音語
- ・置換の改善
- ・異常構音の指導、側音化構音の改善
- ・会話レベルで正しい発音ができること
- ・キャリアオーバー

<指導についての考え方、対応に関すること>

- ・ 早い改善
- ・ 改善を急ぎすぎない、焦らないこと
- ・ 状況によっては練習の段階を戻る（もう一度前の段階を行う）
- ・ 丁寧にかつ早く改善すること
- ・ 構音障害があってもコミュニケーションを楽しめること、楽しく話すこと
- ・ 構音指導が楽しい時間であること、楽しく面白い活動を通した指導を行うこと
- ・ 楽しい関わりをすること
- ・ 話しやすい雰囲気を作ること
- ・ リラックスした雰囲気を作ること
- ・ 構音以外の状態の把握
- ・ 子どもの気持ちにより添うこと、困っていることにより添うこと
- ・ 意欲、やる気を持続させる工夫
- ・ 個々の実態に合わせること
- ・ わずかな変化を認めること
- ・ 話す楽しさを味わわせる
- ・ 構音だけでなく全体の成長を大切にすること、子どもの全体を見ること
- ・ 終了の見通しをもたせること
- ・ 学習内容の意味づけ、学習内容の意味を理解させること
- ・ 自分らしく暮らすための支援
- ・ 生活をしやすくすること
- ・ 生活場面での対処法の指導

<子どもの心理面や担当者との関係に関すること>

- ・ 本人の気持ちやニーズの把握
- ・ うまく発音できないことを気にしないようにすること
- ・ 自分の障害を負担と感ぜないようにすること
- ・ 改善に向けての意欲
- ・ レポートの形成
- ・ 自己肯定感
- ・ コミュニケーション意欲
- ・ 話す意欲
- ・ 話す自信
- ・ 本人の障害の受容
- ・ コンプレックスの軽減
- ・ 気持ちの安定
- ・ 子どもが話したいと思えるような担当者との関係を築くこと
- ・ 努力すればできることの実感

<連携に関すること>

- ・ 家族との連携
- ・ 保護者同伴での指導
- ・ 学級担任との連携
- ・ 在籍校での二次障害の予防

- ・地域とのつながり

#### <その他>

- ・指導の工夫
- ・教材の工夫
- ・積極的に話す時間の確保
- ・「来てよかった」と思える場にする

### ③吃音のある子どもの指導について重視していること

この項目への回答は853件あった。回答の内容は、7つのまとまりに整理・分類できた。

#### <吃音の症状に対すること、発話に関すること>

- ・難発からの脱出法
- ・流暢性の確保（そっとゆっくり話す、舌の脱力、等）
- ・吃音の軽減を図る、吃音をコントロールするための指導
- ・楽に話せる呼吸・リズムをつかむ
- ・発話における、力の入れ方、抜き方
- ・柔らかく話す練習、なめらかな話し方、脱力した発話法
- ・吃音が目立たない話し方
- ・話す速度
- ・音読
- ・発話練習
- ・楽にどもる
- ・吃音が悪化、あるいは軽減する要因を探る
- ・吃音が出やすい状況の把握
- ・吃音を意識しないで話せること

#### <教師の対応、環境に関すること>

- ・吃音を気にせず話せる環境作り
- ・教室を安心できる場にする
- ・環境調整
- ・本人が話し終わるまで待つ
- ・言い直しをさせない
- ・子どもの心に寄り添う
- ・温かい雰囲気
- ・リラックスした遊び
- ・一緒に音読をする
- ・吃音をマイナスに捉えない
- ・話し方よりも話の内容を重視する
- ・子どもにとっての問題を探る

#### <子ども本人の吃音・自己に対する姿勢に関すること>

- ・どもっても最後まで話す
- ・自分と向き合う、自己を見つめる、自己理解
- ・吃音について知る、吃音を理解する、自己の吃音の特性を知る
- ・吃音の理解、吃音の基礎知識を学ぶ

- ・吃音を抱え、どう生きていくか考える
- ・吃音との直面、受容
- ・吃音があっても前向きに考える、どもることが悪いことだとは思わせない
- ・自分の吃音について話す、自分の吃音を語る力の育成
- ・自己表現力の向上
- ・吃音についてオープンに話し合う
- ・吃音とのつきあい方

＜子どもの心理面や担当者との関係に関すること＞

- ・子どもとのラポート、信頼関係
- ・自己肯定感
- ・情緒のコントロール
- ・発話意欲の維持
- ・自己実現
- ・安心感
- ・心の持ち方
- ・吃音に対する心理的耐性
- ・レジリエンスを高める

＜コミュニケーションに関すること＞

- ・気持ちを伝える力を付ける
- ・コミュニケーション力

＜日常生活に関すること＞

- ・困ったときの対処法
- ・在籍学級で困っていることを把握する
- ・吃音に対するリスクマネジメント

＜その他＞

- ・在籍学級や家庭との連携
- ・ペア指導
- ・ワークシートでの吃音の学習
- ・いろいろな生き方の交流
- ・青年期、成人期への見通し

④言語発達の遅れのある子どもの指導について重視していること

この項目への回答は828件あった。回答の内容は、4つのまとまりに整理・分類できた。

＜語彙、構文力等の言語力、コミュニケーション等に関すること＞

- ・コミュニケーション量の確保
- ・自由会話でたくさん話す
- ・表現を広げる、表現力を高める
- ・語彙を増やす、理解語彙の拡充
- ・構文力の伸張
- ・場に応じたことば、語用論的関わりの重視
- ・生活に結びつくことばを重視する
- ・特殊音節の指導

- ・音読
- ・文字の指導
- ・短文作り
- ・使えることばを増やす
- ・気持ちの表現
- ・ノンバーバルなコミュニケーションを大切にする
- ・読み書きの指導
- ・音韻意識の向上
- ・ことばの意味調べ
- ・文字と音を結びつけること
- ・体とことばを結びつけること
- ・動作化することで意味を学習する
- ・三項関係を基盤とした指導

#### <教師の対応、方法に関すること>

- ・視覚的な教材教具の使用、教材・教具の工夫
- ・実態把握を重視している
- ・ことばの育ちを阻害する要因を探る
- ・遊びを通じた指導、楽しみながら指導する、楽しい活動を行う
- ・スモールステップで取り組む
- ・やりたいことを尊重する
- ・子どもに合わせた指導を行う
- ・できるだけ自然に指導する
- ・受容的態度で関わる
- ・興味・関心を深める、興味・関心のあることに取り組む
- ・伝えたい気持ちを大切にする
- ・話し方や内容を否定しない
- ・担当者が子どもにとって話したいと思われる相手であること
- ・適切な課題の設定
- ・達成可能な目標設定
- ・会話の楽しさを味わう
- ・言語刺激を多く与える
- ・発達段階に合わせた指導を行う
- ・子どもとの共有体験を大切にする
- ・体全体の発達を促す
- ・身近なことから取り組む
- ・口・舌のトレーニング

#### <子どもの心理面や担当者との関係に関すること>

- ・自己肯定感
- ・自己理解
- ・子どもとのラポート
- ・共感関係を築く、関係作り
- ・心に寄り添う

- ・コミュニケーション意欲
- ・自信をもって話す
- ・達成感を味わう、成功体験、「できるという」感覚

＜その他＞

- ・ソーシャルスキル
- ・生活経験
- ・教科の補充
- ・保護者支援
- ・助けを求める力をつける
- ・ことば遊び（クロスワード、しりとり、すごろく、等）
- ・就学、進路
- ・全体的な認知発達
- ・絵本の活用
- ・運動面の指導（粗大運動、微細運動）
- ・自分らしく暮らしていくための周囲への働きかけ
- ・生活を豊かにすること

⑤「その他」に該当する子どもの指導について重視していること

この項目への回答は449件あった。回答の内容は、4つのまとまりに整理・分類できた。

＜指導内容に関すること＞

- ・文章の理解
- ・日本語指導
- ・計算
- ・ソーシャルスキル
- ・認知特性に応じた指導
- ・社会性の向上
- ・穏やかな人間関係
- ・音と文字のマッチング
- ・ルールやマナーの学習
- ・気持ちの表現
- ・コミュニケーション力
- ・音声以外のコミュニケーション手段の充実
- ・得意な面を伸ばす

＜教師の対応、方法に関すること＞

- ・子どもの背景を知る
- ・実態把握
- ・子どもの発するサインを見逃さない
- ・環境調整
- ・自分を出せる場の提供
- ・子どものペースに合わせる
- ・優先事項の検討
- ・達成可能な目標の設定

- ・やりたいことを受け止める
- ・ことばで伝え合う楽しさ
- ・自分らしくいられるように支援する
- ・次回も来たいと思えるような指導

#### <子どもの心理面や担当者との関係に関すること>

- ・子どもとのレポート
- ・心理面の安定
- ・気持ちの安定
- ・達成感を味わう
- ・感情のコントロール
- ・特性の理解
- ・自己肯定感
- ・自己表現

#### <連携に関すること>

- ・保護者との連携
- ・保護者支援
- ・在籍学級との連携
- ・在籍学級で集中できるような支援
- ・福祉センターとの連携

以上、指導において重視していることについて、障害別に回答記述を整理した。どの障害種においても、言語・コミュニケーションに関すること、教師の対応に関すること、障害受容や気持ちの安定等の心理面に関すること、子どもと担当者との関係に関すること、連携に関すること等について触れられていた。とりわけ、レポートの形成、自己肯定感、話す意欲や自信等については多くの回答に共通して記述されていた。

上記に加えて、難聴については、聴覚管理に関すること、情報保障に関すること、自立に関すること、教科学習に関することに触れられていた。構音障害については、構音に関する具体的な事項と、構音指導に関する考え方に触れられていたのが特徴的であった。吃音については、子ども本人の吃音や自己に対する姿勢・向き合い方や、生き方、日常生活での問題への対処等に触れられていたのが特徴的であった。言語発達の遅れについては、語彙や文法、文字の指導のほか、具体的な子どもへの関わり方に多く触れられていた。また、連携という記述だけでなく、保護者支援の記述が多く見られた。その他については、認知特性に応じた指導、ルールやマナー、社会性の向上等の記述が多く見られた。

前回の調査では、指導において「重視していること」ではなく、「課題となっていること」について、難聴と言語障害の2つの括りで聞いており、指導内容や方法、対応、関わり方等についての課題と、教室運営や制度上の課題が挙げられていた。従って、前回の調査と比較することはできないが、前回、指導内容や方法、対応、関わり方について課題とされていたことのいくつか（自己肯定感を育むための指導・支援、楽しく学べる教材の工夫、側音化構音等の指導、通常の学級担任や保護者との連携、等）、今回、重視していることとして記述されていた。重視すべき事項であるからこそ、その困難さが課題とされていたと考えられる。